

本日の学び テーマ：「『その日』を待ち望みつつ」 イザヤ25章1-9節（10節a）

【理解の手がかりとして】

今課のテキスト25章1-9節（10節a含む）は三つのまとまりで記されている。

① 1-3節

イザヤは言う。「わたしの神」は「驚くべき計画」を成就してくださる、と。そしてそれは「遠い昔から」歴史を貫いて現されてきた「揺るぎない真実」である、と。

その「計画」とは、「都」の陥落である。この部分であらわされる「都」とは何のことなのか。結論「バビロン」と理解する。イザヤがこの預言をした時、バビロンはまだ陥落しておらず、バビロンの名を明らかに出来る状況ではなかった。もしその名を直接明示したら、迫害は必至であり、それを避けるためにも「黙示的」に表現するしかなかったものと推測する。

イザヤはその「都（バビロン）」の崩壊を告げる。「石塚」とは石碑や墓石を意味するから、その都の終焉を指し示しており、堅固な城壁も瓦礫となり、バビロニア人の華やかな建物も失われるといった預言である。そしてそのことによって「強い民（それまで強かったバビロニア人）」が「あなた（神）」を敬うようになり、「恐れる」ようになる、というのである。

① 4-5節

この部分には、神がどのようなお方なのかが明示されている。すなわち神は「弱い者」にとっては「砦」であり、「豪雨を逃れる避け所」であり、「暑さを避ける陰」であられる。一方

「暴虐な者」にとっては「壁をたたく豪雨」となり、「乾ききった地の暑さ」のように振舞われる、と。神は「雲の陰が暑さを和らげるように」弱い者の苦しみを和らげてくださる方なのである。

② 6-9節（10節a）

「この山」とはエルサレム（シオン）を意味していると理解する。バビロンの支配が終わり、エルサレムの山で祝宴が開かれるであろう、との預言である。すなわち捕囚の民が解放されて、故国に戻って喜び祝うイメージである。「良い肉」（脂肪に富む良い肉）と「古い酒」（えり抜きの酒）とはいずれも高価なもの。その喜びの大きさを表している。

「布」というのは覆うものである。すなわち「見えなくさせるもの」である。それが「民の顔」から、また「全ての国」から取り払われるというのは、「見えるようになる」ということ。何が・・・それは神の「救い」（25:9）である。それは「神の栄光」と言ってもよいだろう。

その時、「死は永久に滅び」「すべての顔から涙がぬぐわれ」「民の恥が地上から拭い去られ」のである。それが「救い」であり、そのことをイスラエルは「待ち望んで」いたのである。そしてその救いの主の支配は、「この山」（エルサレム）に永遠にとどまるのである、と預言するのである。それらのことが起こる「その日」（25:9）、その日をイスラエルは待ち望み続けたのである。

■ 『聖書教育』より

➤ 「イザヤの預言は正義と公正が行われる事でした。人の強さではなく、神に頼ることを

語り続けました。抗いようのない苦難の中で、涙の中でうつむく時になお『その日』を賛美することができる源は、『あなたはわたしの神』です。」（1.あなたはわたしの神）

- 「『その日』には・・・すべての苦しみや恐れから解放され、豊かな主の食卓に招かれ、命を喜ぶことができるのです。」（2.主の祝宴）
- 「『わたしたちの神』という告白・・・一緒に生きる『誰か』の生き方に無関心ではいられません。苦しみの中を生きる時、『その日』を確信しつつ、その完成を思い描きながら、今与えられている命を大切に生き合う歩みを進めていくことができる」（3.この方こそ私たちの神）

黙示は「その日」の出来事を示しつつ、そのことへの確信を与え、待ち望み（希望）の信仰へわたしたちを導く。「生き合う」という言葉づかいが印象的である。

「その日全世界が」

わが神主よ 見させ給え 偉大なるその計画 天が開き 光が満ち シオンの上にとどまる
救いの御業 全地を覆い 喜びの歌響かせ その正義は 平和を呼ぶ 主の御霊が流れる
その日全世界が 主の御名高く掲げる 叫べ 王の王イエスに ハレルヤ 栄光永遠にあれ
王の王なる主イエスに 全能なる主イエスに 勝利者なる小羊に 栄光永遠にあれ
その日全世界が 主の御名高く掲げる 叫べ 王の王イエスに ハレルヤ 栄光永遠にあれ